

## 別紙 4

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目 障害者と健常者の連带的労働の形成過程

——障害者運動団体「わっぱの会」を事例に

(Developing Process of Mutual Work by Disabled and Able-bodied People:

Case Study of a Disability Movement by Wappa-no-Kai)

氏 名 伊藤 綾香

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、障害者と健常者との共同生活・労働の場づくりを 40 年以上にわたり継続してきた障害者運動団体「わっぱの会」を事例に、連带的労働の仕組みがどのように作られてきたのかを、健常者メンバーの関わり方に着目し明らかにすることである。

社会科学の領域では、これまで構築主義的アプローチにより、障害者排除が相互行為場面において生まれてきたことが明らかにされてきた。現在、障害者差別解消法が日本で 2013 年に制定されるなど、法整備が進んできており、実質的な包摂はどのようにして可能となるのかを考える段階にきている。

序章では、こうした背景を踏まえて、本論文の問題設定を行なった。第一節では、障害者を取り巻く状況、特に労働現場における障害者の排除に対する社会的なアプローチについて論じたうえで、1960 年代から 70 年代にかけて高揚した学生運動の対抗文化を引き継ぐ運動の一部が、障害者との対等性を重視した労働統合型社会的企業へと展開してきたことを取りあげ、そうした活動に着目する必要性を示した。

第二節では、先行研究の課題を整理しながら、本論文の問いを提示した。これまで障害者運動は主に障害学の観点から研究されてきたが、障害者以外のアクターの関与への着目が少なかった。このことによる実践上、学術上の陥穽として、先行研究では、それ以外の人々の活動への巻き込みの困難という「問題の内部処理」問題を提示した。本論文は、それが「産業社会の支配的な価値」とは無関係のところでは障害者の社会参加を論じることで生じるものであるということを踏まえ、職業労働の領域における参加の実現可能性を検討することとした。

障害者の労働は、日本では制度上、就業能力に基づき一般就労か福祉的就労かに振り分

けられるが、近年、いずれでもない働き方として、労働統合型社会的企業への注目が集まっている。ただし、先行研究は、制度的、経営的視点に偏ってきた。対して、本論文は、労働統合型社会的企業における具体的な実践に着目した。そこで、先行研究による、現代社会において、必ずしも「生産的」ではないかもしれないような人々も含めた保障への参加という連帯の現代的意義に着目し、「諸個人の中に相互の生を支援しよう——そしてそのための義務・責任を引き受けよう——という意欲／動機づけがある関係性」と定義される連帯概念を取り上げた。そして、連帯には法制度による「非人称的な連帯」と、具体的な人々の関係形成による「人称的な連帯」という二つの次元が存在することを指摘し、後者に基づく労働を連帯的労働と位置づけ、それがどのようにして可能になるのか、労働統合型社会的企業の具体的事例をもとに検討することとした。

以上を踏まえ、第三節では、本論文の分析枠組みを提示した。これまでの非営利組織論の議論を整理し、本論文の分析枠組みに適用できる論点と課題について検討し、①連帯的労働の基盤となる相互性の論理が現場でどのように現出するかを明らかにしたうえで、②それがなぜ可能となるのかを、組織の形成過程の分析から明らかにするという二段階の分析過程を設定した。

第四節では、本論文の調査方法を提示した。本論文は障害者運動団体「わっぱの会」を取り上げた。「わっぱの会」は、コミュニケーションに始まり、社会福祉法人化以後も成員の組織運営・報酬・就業上の地位の対等性の確保という、コミュニケーションにおける平等性を維持しようとしながら、40年以上にわたり活動を発展的に継続させてきた。日本における労働統合型社会的企業の代表事例として、「わっぱの会」は本論文で取り組む課題の素材となりうる。データは、2010年から2016年にかけて行なった参与観察、聞き取り調査、質問紙調査、さらに文書資料から収集した。

第一部では、「連帯型」の活動現場でどのような働き方が表出するのかを明らかにした。第一章では、事例の概要および特質を示した。日本において1960年代から80年代にかけて登場した障害者運動を、先行研究による整理をもとに概観し、そのうち、「権利保障型」「自立生活運動」「告発型」の運動をそれぞれルーツに持つ代表的な三団体「ゆたか福祉会」「A J U自立の家」「わっぱの会」を取り上げ、それぞれが運営する知的障害者就労支援施設における障害者と健常者の関係と労働のあり方を比較した。結果、前者二つはそれぞれ賃金補填、ワークフェアという既存のあり方につながるのに対し、「わっぱの会」の運営する就労支援施設は、単に障害者の労働包摂だけでなく、参加する人々同士の協調的な関係を志向する点で、それらとは一線を画するものであることが分かった。

第二章では、「わっぱの会」の労働実践について、第一章に続き、会の事業所「すずらん」を事例に掘り下げた。結果、「すずらん」では、障害者も健常者も同じ賃金体系の下で働くことで、両者とも結果としての生産への寄与の度合い自体は問わないものの、本人のもつ力をそこにできる限り注ぐことを義務として期待されていた。加えて、「すずらん」単体でなく会全体での事業運営により、高い事業性へのプレッシャーの抑制と生活の保障もなされていた。こうした条件のもと、いわば運命共同体の中で、相互の生を支援しようとする動機づけが生まれ、連帯的労働が実践されていた。

第二部では、こうした連帯的労働がどのように形成されてきたのかを明らかにした。

第三章では、「わっぱの会」の前身であるボランティア（ワークキャンプ）活動にさかのぼり、連帯志向性の形成とその実践過程を分析した。結果、「わっぱの会」における「連帯」

は、学生運動の高揚という時代背景とワークキャンプの思想とが結びつき、さらに、実際に障害者と健常者との生活を通して、それを長期にわたって続けるための模索のなかで生みだされたことがわかった。会の「連帯」は、コミュニケーションという性質上、共同生活や労働への参加者を、障害の有無にかかわらず等しくメンバーとして扱い、運営を共に担い、活動体の中で相互の生を支援しあうものである。その関係形成の特徴は、障害者と健常者の両者が異なる立場を維持したまま、様々な関係のありようを一緒に模索する点にある。会における相互支援の動機づけは、自らの生活の維持・発展において立ち現れていた。

第四章では、1970年代から1980年代に行なわれた「わっぱの会」における自前の事業の確立および社会福祉法人化の過程を分析した。結果、「わっぱの会」は、作業用地をめぐる行政との交渉の中で、行政からの援助を正当化し積極的に受け入れるが、その内容については批判的にとらえ、時に変更を要請するという、受け入れるが迎合しないという会のスタンスを身に着けた。会は財政基盤の安定という課題に対し、自前の事業として製パン業を確立する一方で、社会福祉法人化の動きを進めたが、その際にこのスタンスのもと、独自の制度を作るなど、10年以上かけて構築してきた働き方や関係性を維持できるよう対処した。先行研究の指摘した、「政府の代理人化」「組織アイデンティティの変容」のリスクを最初から認識することで、リスクを回避したのである。会はこのようにして、その制度を担う一人ひとり意識していない、「非人称的な連帯」である制度を利用しながら、組織レベルで、会員同士の生活を支えることを介しての具体的なつながりである「人称的な連帯」を可能とするための財政基盤を作り上げた。

第五章では、こうした財政基盤が、現在「わっぱの会」のメンバーのリクルートや引き留めにどのように寄与しているのかを明らかにした。結果、「わっぱの会」では、その事業性が、必ずしも運動や活動に関心のないメンバーにも門戸を広げていた。しかも、多少の人数の出入りがあっても左右されないほどの規模があることで、離脱へのプレッシャーを低減し、リクルートにつなげることもできていた。一方、比較的給与が低いことや、能力や貢献にかかわらず給与が同じであるという、メンバーを留める上で不利と思われる条件であっても、志向する働き方や分配方法を実践することで、現状で約半数の健常者メンバーの引き留めに成功していることが分かった。

終章では、以上の本論文の知見を整理したうえで、その意義と課題をまとめた。

本論文は、大きく分けて、社会的企業研究と、障害をめぐる社会学という二つの領域に新しい視点を加えるものである。まず、本論文は、労働統合型社会的企業の「闘い」を、志向性と組織基盤の双方の形成過程から検討したが、前者については、学生運動の高揚という時代に生まれた思想が、運動の展開の中で練り上げられながら、障害者との労働をめぐる、現在の活動に生きていることを示した。このことは、学生運動の現代社会への影響の一端を解明するものであるとともに、労働統合型社会的企業として取り上げられる他の活動との、根幹の部分での違いをつかむことに寄与する。後者については、「政府の代理人化」や「組織アイデンティティの変容」のリスクを低減させる方法を提示し、社会運動と制度化という課題への一つの解を与えるものである。

続いて、障害をめぐる社会学に対しては、異質な人々、ここでは重度の知的障害者と健常者による「連帯」の一つの形を描き出した。このことは、組織レベルでの工夫により、「非人称的な連帯」と「人称的な連帯」とをつなぎ具現化することが可能となることを示すものである。さらに、労働というフィールドへの着目から、「問題の内部処理」を乗り越える方法の一例を示すものともなった。